

平成 13 年 8 月 21 日

重要文化財・自由学園明日館、進む保存・修復工事

70 年前に描かれた壁画が在校生の手でよみがえる

「自由学園」は、大正デモクラシー期の自由教育運動の象徴として、1921（大正 10）年に羽仁吉一・もと子夫妻によって西池袋の地に設立された。その開校当初の校舎として建てられた「明日館」は、旧帝国ホテルの建設のため来日していたフランク・ロイド・ライトの設計によるもので、国内に現存する数少ないライトの建築物として、その文化財的な価値の高さから、1997 年に国の重要文化財に指定されている。

重要文化財の指定を受け、保存・修復工事の進む「明日館」において、解体工事の最中、校舎の中心に位置するホール西側の漆喰壁の下から壁画が発見された。この壁画は、1931 年（昭和 6）年、学園の創立 10 周年を記念して当時の在校生が描いたもので、当時一流の教師を集め最高の教育を目指した自由学園の理念に基づき、著名な洋画家であった石井鶴三氏の指導のもと、20 人の生徒が制作にあたった。

縦 2.5 メートル、横 5 メートルに及ぶ壮大なスケールのフレスコ画は、旧約聖書の出エジプト記を材にとり、モーゼに率いられエジプトから約束の地カナンを目指すユダヤの人々が描かれている。当時の記録によれば、創立 10 周年にあたり、出エジプト記 13 章の「エホバ彼らの前（さき）に往きたまい、昼は雲の柱をもて彼らを導き、夜は火の柱をもて彼らを照らして、昼夜行き進ましめ給う」が記念する言葉として選ばれたことに則ったものである。

壁画の画面は三つの大きな三角形で分割され、一番上の部分には群青の空を背景にヘブライ語で旧約聖書の文字、一番下の部分は温かみのある土色の砂漠に植物の図案、そしてその間を落ち着いた色調で群衆が帯のように描かれ、その群集が目指す方向、天地の交わるところに、神の導きの象徴である雲の柱が真っ直ぐに立ち上がっている。この単純で力強い構図は、印象的な幾何学模様を基調とするライト建築の室内装飾と調和するよう、生徒達自身が考え出したもので、当時の学園新聞にも、「雲の柱、火の柱に導かれつゝ壁画を描く」と題して、その構図に辿りつくまでの試行錯誤、制作への意気込み、神の導きにより精神としての美を表現したいと言う深い思いが綴られている。

今回、保存修復工事の過程で、上塗りの壁の下からこの壁画が発見され、自由学園は文化庁の許可を得て、これを修復保存することとした。修復といっても描かれた当時の絵を復元するのではなく、重要文化財として復元される建物との調和を優先し、年月を経た壁の肌触りや色調など現状の持ち味を活かしての修復作業がおこなわれることとなった。

修復作業に参加しているのは、学園長・羽仁翹氏の「学生の手で作られた壁画を学生の手で復元したい」という呼びかけに応じた自由学園最高学部（大学にあたる）の 19 名の学生。学生達の指導には、法隆寺金堂壁画の現状模写をはじめ、数々の壁画制作・修復に携わり、自由学園の美術教育にも深い係わりを持つ武蔵野美術大学教授で日本画家の滝沢具幸氏を中心に、特色ある美術教育を誇る学園の美術教師陣が全面的にバックアップしている。

日本画は初めてという学生達だが、滝沢教授から修復作業の基本講習を受け、この夏休みの 7 月 16 日から 40 日間に及ぶ猛暑の中の作業を続けてきた。作業は今週 25 日まで続けられる。参加した学生の一人、細田和宏さん（3 年生・21 歳）は、ただ上から色を塗るのではなく、原画の筆使い、さらに壁の凹凸や自然な色の剥がれ具合をも活かして、点と線で修復していく作業について「自分を殺さなければできない作業。でも、かえってそれが面白く、すっきり、はまっちゃいました」と、初めての経験にのめりこんだ様子だった。

※ 「明日館」の保存修復工事は 9 月下旬完成予定、11 月 13 日から一般公開予定。

詳細：自由学園明日館